公認愛知作手大会(5/4)

山本英勝他

男子エリートは松澤が制す

初のワールドカップ興奮の余韻も冷めぬうちに、再び東海で開催された公認愛知作手大会は、2005年世界選手権誘致に向け盛り上る東海地区の運営レベルの高さを充分に裏付ける内容だった。

会場は今年度インカレ会場予定である愛知県南設楽郡『作手村 鬼久保ふれあい広場』。
事前申込で600人もの参加者がゴールデンウィークの大会に押し寄せた。

テレインは1992年に愛知大学が大会を開催した『亀山城址』のリメークだ。

一万分の一としてリメークされた『曲り峠』は、急峻ではあるが植生が良好な走りやすいテレインである。いくつかの山塊が中央の集落によって分けられる形になっている。この山塊らは大きな尾根と深い沢に伸びる枝尾根から構成され、競技者のルートプラニングや尾根辿りの能力が試された。

選手権クラスでは日本を代表する選手らが揃い、ハイレベルな争いになった。男子はワールドカップ代表、松澤俊行（京葉OLC）が村越真（静岡OLC）に二分以上の大差をつけ、優勝。リズムが良くほとんどノーミスだったと言う松澤は、公認大会で村越に初勝利。3位から5位も山口大助（鳩の会）、藤城公久（筑波 ROC）、加賀屋博文（渋谷で走る会）とスコットランド世界選手権の代表選手らが力を見せつけた。

一方女子はベテラン木植早苗（チーム白樺）が地元東海の落合志保子（OLC ルーパ）を抑え優勝、昨年末からの好調を維持している。昨年度初の日本選手権優勝を果たした金並は3位。

本テレインは今年度のインカレテレインと類似していると考えられ、学生の争いも注目された。女子は6位の塩田美佐（筑波）はじめ、上松佐知子（筑波）、森田有希子（静岡）と3人が10位に入った。一方男子では、紺野俊介（早稲田）が唯一10位の好成績を残している。彼らが3月までにどの程度成長して戻って来るか楽しみである。

学生3位の森田有希子（静岡大学）

大会は競技の面だけではなく、運営全般に渡って評価する点が多かった。特に最近では普通になりつつある、大会情報のインターネット上開示という面でも積極的な更新が行われていた。試走の感想や、テレインの状況、スタートリスト、会場の情報などが逐次更新され、参加者の期待を膨らませて行った。

ホームページによる情報提供は大会終了後も積極的に続けられ、県協会会長の挨拶、競技責任者の解説をはじめ、成績や選手権クラス優勝者ルートを見ることが出来る。ホームページのアドレスは、以下の通りである。

http://www6.freeweb.ne.jp/sports/mikawaol/index.html

また、最近増えてきた家族オリエンティアにも満足できるよう様々な工夫がなされていた。保育所も設けられ、赤ん坊を連れてきていた夫婦も多かったようである。会場である「ふらあい広場」内では別マップによるパークOがオープンされ、初心者や子供が気楽に参加できた。意欲的な試みとして注目したいのが、初心者クラス、年少者クラス、グループクラスでの、テープによる誘導である。チェックポイントにテープが巻かれ、ウォークラリーやハイキングの愛好家などがより参加しやすいよう、オリエンテーリングの敷居を低めるのが目的だ。

競技の面での質の高さだけでなく、こういった新しい試みにチャレンジした公認愛知作手大会は愛知県の運営能力の高さと、2005年の世界選手権誘致への意気込みを充分に感じさせる内容であった。

男子エリート優勝、松澤に聞く

Q1：今回のレースで意識した点、準備などで特別なことはあったのかな？

A1　リメイク前の地図で走ったことのあるテレインでしたので、その地図をざっと眺めてみました。あと、近場で行われた4年前の公認大会でも上位（2位）になっているので、そのレースで見たものを映像的に思い出すと共に、感触を蘇らせるようにしました。ただ、木曜日のレース、しかも合宿の合間とあって、気分を盛り上げるのに普段のレースよりも苦心しました。

Q2：僕（村越）自身、前半もたもた感はあるものの、後半はよく走れもしたし、ミスもなかったので、よもや負けるとは。しかも2分差がつくとは。正直言ってショックだった。松澤も調子はよかったのかな？

Ａ２　そうですね。結構軽快に走れました。レースでもルートチョイスに迷った時に練習になる方を選んで、シンプルなルートを選んだ選手にタイムで負ける傾向があるのですが、合宿中ということもあって、今回は道回りに徹していました。それが効を奏したようです。

Ｑ３：６へのアタックや８や１５など、処理に気を遣うレッグがあったが、ここらの処理はどうだったか？いつもの松澤なら、こういうところでロスタイムがあるように思うが。

Ａ３　この日は、こういったレッグを単純化する読みがうまく働いたと思います。そして、それを補強しているのはコンパスです。ちなみにこの日は１５回ほど１－２－３をしています。

Ｑ４：ちょっと意地悪い質問をしよう。２分差がついたとは言え、４と６といういっきのアップがある２レッグだけでその差がついている。１３や１７などほとんど道を走るだけのレッグでも、互角に近いレースができている。その意味ではあまり負けた気はしないんだが。

Ａ４　確かに村越さんに対しては走力相応の差が付かなかったようです。村越さんのナビゲーションに対する畏敬の念を新たにしますが、やはり自分の勝利には胸を張りたい気持ちです。

少し前まで、村越さんからは競技者として扱われていないと感じていたので、多少なりとも自分を意識しているような発言が引き出せただけで嬉しく思っています。

コースに恵まれた、という声も聞かれますが、そもそも私が村越さんに勝つこと自体ありえないと思われていた時期もあります。競技を始めて数年以内に結果を出す選手が「才能がある者」と、とらえられがちですが、５年・１０年と続けて初めて、しかも自分だけが気付くという才能もあります。

技術体系の組み上げ、というのは本当に時間と労力の掛かるものです。「諦めず続けて、向上の喜びを知りましょう」とこの場をお借りして訴えておきます。

Ｑ５：松沢はここ２年ほど安定して上位の結果を残せるようになった。しかし、脚の速さを考えたらもっと早いレースができると思う。またリレーなど勝負弱さを感じさせるレースが時々ある。松澤自身はその点についてどう考えているかな？

Ａ５　人は、他人を実際以上に色分けをすることを好みます。自分は今まで色々なことが出来ない出来ないと言われてきましたが、少しずつ課題を克服しています。周囲の評価はヒントにはするが必要以上に気にしない、というのが今のスタンスです。

国際大会に出た選手の多くは、ワールドクラスの選手の走りを目の当たりにして、「何かを省いて動きを速くしなければ」という錯覚に陥っていると思います。実際には、彼らは何かを省いているのではなく「圧縮している」のでしょう。

今の私も「圧縮」を意識していますが、圧縮しようにも中身がスカスカでは様にならないので、骨格の強化にも気を配っているつもりです。「真にスピードを活かす」ような走りをお見せするのはもう少し先になるかもしれません。

リレーについては、得意になったり苦手になったり、という感じです。ただ、周囲の印象に残るのは失敗の方でしょうから「リレーで勝負弱い」と感じさせるのも致し方ないと思います。

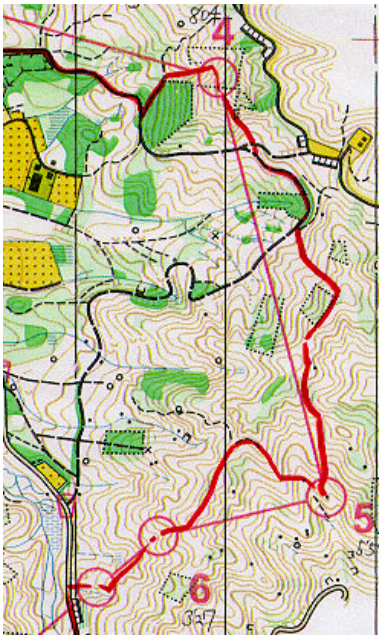
国際大会のリレーは、国内のリレーで結果を残すスタンスで臨んでも対応しきれない部分があることをこの１年で痛感しました。先の「スピードを活かす」走り獲得の動機付けとしてリレーのことは常に意識していきたいですね。

エリートルート解説

Ｍ２１Ｅコースと同コース優勝者、松澤のルートを見てみよう。

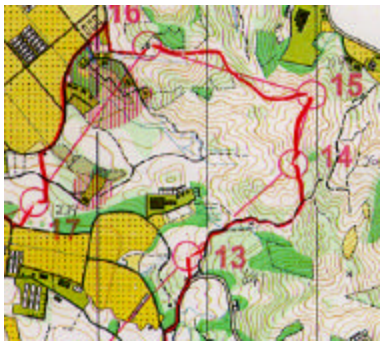
１，２はスタート直後だが、地形読みを要求されるレッグである。難度はそれほど高くはないが、エリートコースの導入としては、適度な難度を持ったレッグである。松澤は、この区間を率なくこなして、いいスタートである。

中盤の山場、４から７に書けての区間である。４はアタックまではほとんど道を走れるレッグであるが、最後に５０m近い登りがある。村越も指摘するように、ここで１分近い差がついている。４－＞５は村越が老獪にラップを奪ったものの、６は、松澤がクレバーなルートチョイスで、やはり他を圧倒。



９や１０も難しくはないが、エリートクラスにおいては一瞬のもたつきやロスが、ボディーブローのように利いてくるレッ

グである。ここでも松澤は無難にこなしている。
　１２への出方は明らかにミス。
　１４－１６も、地形読みを要求される好レッグである。ここでも松澤は無難かつ高速にこの区間をこなしている。このレースにおける松澤の好調ぶりを伺わせるルートである。



愛知・作手大会運営者から

小野　盛光

隣接する下山村で９６年に公認三河 OLC２０周年記念大会を開催してからちょうど４年目の同じ５月４日に再び、公認大会を企画しました。今回は愛知県オリエンテーリング協会に主催者となっていただき、最初の地元交渉、JOA との諸手続きをお願いした。

コントローラはなるべく近県のの方にお願いしたかったが、隣接県には当時見えず、知り合いの瀬戸輝久さん（大阪府）にお願いしたところ、快く引き受けていただけた。瀬戸さんにはコントローラの仕事だけではなく、前日、当日は色々手伝って頂き、感謝にたえません。もちろん、コース、運営各方面にたくさんのアドバイスをいただいたことはいうまでもありません。

まずは三河 OLC 会長の安斎秀樹の総括メッセージを読んでください。

三河ＯＬＣ会長　安斎秀樹

１．会場、テレインについて

作手村は、広大な湿原（現在は大部分が水田）と比高の少ない丘陵からなる高原で、手入れの行き届いた人工林が広がる良質なテレインの宝庫です。過去にも学生選手権（インカレ）やＡＰＯＣ（リレー）が開かれました。これからも複数のテレインを開発し、今年度は名古屋大大会とインカレの開催も決まっており、２００５年の世界選手権の候補地にもなっています。「曲り峠」はその中でも緩斜面のエリアと急斜面のエリアが混在し、周辺のテレインを凝縮した、この地域の代表的なテレインといえます。

会場となった鬼久保ふれあい広場は、村民の憩いの場となっている公園です。競技エリアからは距離があり、参加者の皆さまには誘導距離が長く大変だったとは思いますが、作手村での休暇を楽しんで頂けたと思います。なお、会場のふれあい広場は今年度インカレの競技会場として使用されることが予定されいます。学連関係者の方はインカレ当日まで立ち入りが制限されますのでご注意ください。

２．コースについて

ゴール・計算センターを亀山城址に設置することが必要で、スタートも会場に近いところを条件としてコースセットを行いました。前述の通り今後も大きなイベントが開かれることを想定して、上級クラスではなるべく広域を使い、考えられる様々なタイプのレッグを準備したつもりです。そのため一部のクラスではウィニングタイムが公認大会の基準よりも長くなってしまいました。逆にエリアが狭いこともあり、Ｍ２１Ｅでは基準よりも短くなってしまいました。事前（出走前）にコース距離だけでなく、ウィニングタイムの数字も提示することが必要だったかもしれません。

初心者クラス、年少者クラス、グループクラスでは、レッグ上のいわゆるチェックポイントとなるところにテープで目印をつけ、誘導することを試みました。近年、鉄道会社が主催するウォークラリーやハイキング、（短い日程の）トレッキングが盛んに行われています。オリエンテーリングをその一種と位置付けて初心者に体験してもらうにも、参加者の興味を引きつけられるか疑問です（運営力、参加賞、参加のしやすさを考えて）。せっかくオリエンテーリングの大会に参加したのだから、オリエンテーリングらしいレッグをぜひ提供しようと考えました。初心者にとっては地図を読んでコントロールを探すことよりも、普段人が通らない山林を通過することのほうが新しい体験だし、私の身近にいるほとんどの初心者がスタートまでのテープ誘導をたどること自体も面白いと感想を話してくれること、北欧のレースでも年少者クラスでテープ誘導をつけたコースを提供することがあったことを参考にして、このような試みをしてみました。しかし、レッグ自体の難易度が高かったため、時間がかかった選手、チームも少なくなかった。テープ誘導を増やすとか、見通しのいいところをうまく活用するとか改善して、次回も挑戦したいと思います。

広場コースはふれあい広場内でパークオリエンテーリングとして行いました。別の地図でこのようにパークオリエンテーリングをすることは、お子様連れや初心者に対して、有効な方法だと思われます。

３．地図について

「曲り峠」は愛知大学オリエンテーリング部（愛大ＯＬＣ）が 1992 年に作成した「亀山城址」をもとに調査しました。愛大ＯＬＣは実質、活動を停止しているため、「亀山城址」の版権を東海学連が買取り、三河オリエンテーリングクラブ（三河ＯＬＣ）作成「鬼久保」をインカレで使用することを条件に三河ＯＬＣが使わせていただいたものです。

「曲り峠」は今回の大会のためだけに作られた地図ではありません。今後のイベントにも活用していく予定です。利用者が地図の表現について指摘したことを考慮しながら随時修正を加え、ホームページ上で最新の状態を公開するというプランも考えているところです。

４．計算システム

三河ＯＬＣの主催大会では一覧表タイプの速報を提供してきました。これはゴールしていない選手がどの順位に入る可能性があるかも一目で分かるので、公認大会のような見せる大会でも有効かと思っていました。ところが、クラス数が多いこと、参加者が多いことで定期的に速報を出力して、観客の期待に応える頻度で情報を与えることが難しいのではないか、また、一覧表形式だと出力の形態を作り込まなければ多数の人が一度に速報を見ることができないのではないかという意見が出されました。出力用のコンピュータとプリンターの台数を確保すること、また、エリートクラスだけでも一覧表形式にするという選択肢もありましたが、運営の負担を考えて短冊形式の速報を提供するための実績あるOLSYSを導入することに変更しました。

当初の設定よりもゴールする選手が集中し、ゴール地点で混乱する時間帯がありました。バックアップ用のビデオを撮っていたことで問題は起こりませんでした。また、速報の遅れもありました。参加者の方で速報の張り出しに協力してくださった方もいらっしゃいました。ありがとうございました。

大会のあれこれ

（１） 地元の方の好意

私が２次調査に行った時、地元の方が山の手入れをされており、挨拶をしたら、昔、岡崎で働いていた時の話をされ、私の高校生から青春時代の岡崎城付近で開催された、博覧会やスポーツガーデンのについての話に、懐かしい、思い出がよみがえりました。しかし、別な場所で大会前日に新興住宅地の管理人の方から、事前にここを通るという話がなかったというおしかりもありました。

（２） 計算センター

計算担当の尾和さんが連休中に膨大な仕事が入ったため、尾和さん開発の計算システムを十分メンバーに教育できなくなった。急遽、県協会の新帯さんの ０ＬＳＹＳを使うことになり、前夜にリハーサルを実施。個人的には、パーフェクトなパソコン化より、コントロールカードにゴール時刻、スタート時刻が書いてあって、誰でも対応できる形のほうが、人海戦術も容易であり、精神的に優しいやりかただと思っています。

このあたりについて、計算と一心同体のゴールパートの桑山実は

" 速報は,尾和さんがやっているような一覧表の方が,進んでいると思います。でもこれは,パソコンだけのことです。新帯さんのＯＬＳＹＳは,計測,Ｃカード回収,まで含めた,システムです。愛知の全日本では,あれだけの人材を投入しても,悪天候とはいえ,予想した結果が得られませんでした。少ない人材でそのままのシステムを再現しても？でしょう。今思うと,これは,一つのレーンで基本的に１系統のパソコンで処理しようとした場合の限界を越えていたのだと思います。そこでパソコンに関しては,汎用のエクセルを使うことにより,より取っつきやすくし人海戦術も可能にし,一覧表出力で,速報も数分で全員分が完了という簡易さを考えていたわけです。

また今回は,10時から11時半の間に,600人をスタートさせるという,かなり,無謀なスケジュールでした.スポット的には愛知全日本を上回っていたのではないでしょうか.前回の三河OLCの公認大会でも同じだったわけですが、あの時はタイリスの自動計測でしたから,なんの参考にもなりません。

なにかといそがしいとはいえ,ゴールまわりに危機意識がなかったのは大きなミスでした.しかし,ＯＬＳＹＳは,その後,昨年の西日本をへて,このあたり,克服されてきていました. 回収したＣカードは、１０枚程度以下でブロック区切りをつけ、

（役員がランナーに割って入る。この間の人数の確認ができる予定でいたがピーク時にはとてもその余裕はなく回収役員に区切りを伝えるのがやっとだった。）

順番を崩さないようにブロック単位で印刷されたゴール時刻の紙とともに回収地点で，ホチキスでとじます.

（ゴール順番号とゴール時刻のＣカードへの転記は最後まで行ないません。）

ゴール順と時刻は、計測パソコンからＦＤで、計算パソコンへ渡します。この時点で、ゴール順とゼッケン番号の対応を入力します。一覧表形式入力で、一人が読み上げて、数字と Enter キーのみで一気に入力します。その後、ペナチェックを行います。

ペナ入力は、異状がない場合は、上記と同じように一覧表形式入力で一気に行われます。失格入力は、確認のため、名前等を呼び出して行います。

新帯さん自身がオペレーションに加わったということで,さらに具体的に進化していくと思いますが,もう限界ではなく,故障さえなければ,もうちょっとの準備期間さえあれば,まだいけそうじゃないか,とも思います。

時の流れは,Ｅカードとかタイリスのような自動計測に移りつつありますが,今回の計測，Ｃカード回収あたりのノウハウは温めておきたいですね。"

（３） ゴールレイアウト

ゴールするランナーを正面からとらえた写真をみて、私が「オレンジのゴール幕は写真の引き立て役になっていますね」といったところ、コール担当の桑山実からこんな答えが返ってきました。

"考えてみれば，こんなところに普通はないです。Ｆ１レース場みたいで新鮮でしょう。でもなぜそうなったか深い訳があります。ゴール会場は，城址の本丸跡で，構造上進入路が１つでしかも狭く１人しか通れません。ゴールした参加者のながれから考えて，ゴールレイアウトのバリエーションは大体１つに絞られました.ところが前日の準備段階で,最終コントロールから走ってみると,広場に入った瞬間に右方向に 90 度曲がらなければならないのです.早歩き程度でも違和感がありました.そこでスピードののったランナーはゴールから見て右方向へゴールできるよう黄色い旗いっぱいくらいの計時ラインを設定しました。それでもラインはランナーの視線より右に外れたところになってしまうので,ＦＩＮＩＳＨの幕を,地面に置くように設定しました.地面においてあればまさか飛び越えてゴールだとは思わないでしょうから,注意を与えることが出来ると思ったわけです。

このあたり最終コントロからの誘導を含め,結構ゴール役員の間で,いろんな意見があり議論の末最終的には,なかなかいいレイアウトになったと思っていたのですが・・・。当日申込のグループが予想以上に多いということが判明した。

計測ラインは明示的に示さねばならない。（具体的には地面にもラインを表示するなど。）ということで、本当に最終的にコントローラーの勧告で,混乱を避けるために、グループと計時ラインを分ける、計測ライン上では,一人に絞る、ということになりました。

スタートも始まろうとする時刻、パソコン設定や最終リハも残っていたので、議論を避け、急きょ、計測ラインを狭め、グループレーンを作り、変換点に愛知全日本の黄色いウンドブレーカーを着せた子供を立たせ、手を広げて大きくこっちへ行けとゼスチャーをしろ、ぶつかってきても退くな、グループらしき人には声をかけて確認してから誘導しろ、と言っておきました。""ＯＬでは普通そう広くはないですが、計測ラインで一人に絞るのはどうかと思います。ＯＬではクラシックの場合、同時ゴールってあまり重要ではないとはいえ、計測ラインまでは競り合って走り抜ける事が出来なければならないと思います。"

ゴールについてスタートの新見守"はゴールについて一つ気

にかかったことがありました。後わずかのゴールを待っているとき選手が入ってきました。タイムの方はきちっと取っていたんですが、コントロールカードを受け取る人がはっきりしておらず、あわててはさみを探し取った。気のゆるみであると思うが選手にしてみれば、おやっと思ったことであると考えられます。以上のことから、運営に細かい点に配慮がなかったように思いました。人員の少ないところでそれらをどうするかは大変難しいかも知れないが、よい大会とはこのような点も大事であると思います。

（４） スタート

スタート担当の桑山朋巳や新見守のコメント

"個人のスタートは順調に出来たと思います。グループのスタートでは問題がありました。

スタート枠に入る時間が分からないグループが多かった。ＯＬの経験の浅いグループ、初めてのグループには説明し指導する必要があったと思います。スタート係の人数が少なかったから十分な対応が出来ずバタバタしたように思う。スタートから誘導テープにそってスタートコントロールまで行くことが分からないグループも多かった。また、スタートフラッグが２カ所あったため、区分けテープをくぐって別なクラスのスタートフラッグへ行こうとしたグループもあった。これらのグループがＯＬは難しい、大変だと思いもうやめ、と思われてしまうのではないかと心配します。初心者の指導は地図の読み方、コンパスの使い方のみでなく、スタート要領、ゴールした時の細かいことも指導すると安心すると思います。【スタート要領なども当日パネルを使って、説明しているのですが、このことはほんの１０分程度の説明では理解できないですね。図入りのわかりやすい説明書をプログラムと一緒に送って、予習していただくことが必須だと最近は思っています。（小野）】

緊急対応について指を脱臼した選手が大変痛そうにしてスタートに戻ってきました。本部へ連絡し救急病院の対応を調べてもらっていたが、選手をどのように輸送し救急処置をするかの対応が明確でなく個人の判断で動いた。幸い上手くいったがやや判断に迷った面もあった。救急事態が発生したらどうするか事前に手順と役割を決めておきスムーズに対応する。

（５） 貸出用ご準備したコンパスがいざという時に見つからず、急遽、役員からコンパスを集めるというハプニングもありました。

（６） 地図の精度

多くの方から、お褒めのことばをいただきました。しかし、まだまだ、細かい地形表現など十分でないと思っています。原図の精度の問題、調査者の技術不足、時間不足もあったかと思います。私自身、緩斜面、急斜面の違いの表現に細心の注意を払いましたが、製品を見るとそれほど明確に表現されていません。更なる精進を心がけて行きたいと思っています。